

平成 22 年 5 月 30 日現在

研究種目：特定領域研究

研究期間：2005～2009

課題番号：17063010

研究課題名（和文） 北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究

研究課題名（英文） Integrated Research on the Assyrian Civilization in Northern Mesopotamia

研究代表者

沼本 宏俊 (NUMOTO HIROTOSHI)

国士舘大学・体育学部・教授

研究者番号：40198560

研究成果の概要（和文）：本計画研究はシリア北東部にあるテル・タバンの遺跡の調査に研究遂行の主眼を置いた。研究期間内には同遺跡の発掘調査を実施し、新情報が記された多数の古バビロニア時代（前 18 世紀）、中期アッシリア時代（前 13～12 世紀）の楔形文字史料を発見した。これらの文字史料の解読成果により、未解明であった前 2 千年紀前半の北メソポタミアの支配版図の変遷や、アッシリア帝国の形成過程である中期アッシリア時代の地方行政体制の一端を解明することができた。

研究成果の概要（英文）： This research mainly focused on the investigation of Tell Taban, in the north-eastern Syria. We carried out excavations at Tell Taban in this research period. The most remarkable discovery is that large number of Old Babylonian (18 B.C.) and Middle Assyrian (13,12 B.C.) cuneiform texts have been excavated. According to the research result of the study of those texts, we clarified that change of the rule area at the northern Mesopotamia in the earlier half of 2nd millennium B.C. and a part of local administration system on the Middle Assyrian period which is process of formation of the Assyrian Empire.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|------------|------|------------|
| 2005 年度 | 6,300,000 | 0 | 6,300,000 |
| 2006 年度 | 7,900,000 | 0 | 7,900,000 |
| 2007 年度 | 7,900,000 | 0 | 7,900,000 |
| 2008 年度 | 7,900,000 | 0 | 7,900,000 |
| 2009 年度 | 6,100,000 | 0 | 6,100,000 |
| 総計 | 36,100,000 | 0 | 36,100,000 |

研究分野：メソポタミア考古学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：アッシリア、楔形文字、粘土板文書、テル・タバンの、メソポタミア、シリア、ハブル、中期アッシリア時代

1. 研究開始当初の背景

(1) 現在、世界各地で頻発している国家紛争や民族紛争の殆どは近現代の列強の帝国主

義政策が起因している。帝国主義の原点は北メソポタミア（イラク北部、シリア北東部）で前 2 千年紀から 1 千年紀にかけて興隆し

た人類史上初の世界帝国“アッシリア”（前13～7世紀）にあることは疑いなく、この帝国の諸様相の実体が今後の世界の動向を予察し、人類の未来への新たな展望を見出すうえでも非常に重要な役割を担っていると言える。こうした理由から近年、欧米の調査隊は北メソポタミア地方で“アッシリア”の全容解明を共通のテーマとして、積極的に調査研究に取り組んでいる。“アッシリア”は、王を専制君主とした中央集権軍事国家で全盛期の前7世紀にはオリエント全域を制覇し世界帝国を築くが、この人類史の不滅の偉業を成し遂げたのがビシュリ山系を原郷とするセム系民族である。注目すべきアッシリアの支配政策として被征服民族の大量虐殺、強制連行・移住があげられるが、こうした非人道的な政策は近現代の列強の植民地政策や独裁国家の隷属政策と相変わらず、将来、人類が同じ轍を二度と踏まないためにも“アッシリア”を築いたセム系民族の特質を認識しておく必要がある。こうした視点が本研究課題の着想に至った背景である。

(2) シリア北東部のイラク国境近くにあるテル・タバンは、アッシリア帝国の西方進出の拠点として繁栄した遺跡である。1997～99年に同遺跡の発掘調査が国土舘大学により実施された。本調査の大きな成果としては、宮殿状建物跡の一部とともに中期アッシリア時代（前13～11世紀）の楔形文字史料（計71点：円筒形碑文、煉瓦等）が出土したことである。文字史料の記述内容から同遺跡は、アッシリア帝国の属国マリ王国の首都“タベトゥ”であったことが実証され、欧米学会から一躍脚光を浴びる遺跡となった。代表者は2004～06年の科研費（基盤研究（B）海外学術調査）の助成を受け、同遺跡の発掘調査を継続した。注目すべき成果は、2004年度の調査で王宮の文書保管庫から中期アッシリア時代の楔形文字が刻まれた大量（約300点）の粘土板文書が出土したことである。こうした楔形文字史料の発見は、メソポタミア地方での日本隊による50年に及ぶ発掘史の中で初のことで、同年度の大規模な粘土板文書群の発見は、国内外でセンセーショナルなニュースとして報道された。

同遺跡の調査を継続すれば、アッシリア史を解明する上で第一級の新史料を、確実に内外に提供できると期待された。そこで本研究では、上述のこれまでのタバンの調査で蓄積した成果を更に深化すべく、発掘調査を継続し新たな文字史料の発見と建築遺構の全容解明、及び以前の調査で出土した未整理の粘土板文書の解読・研究を行うことを主眼にした。これらの研究成果から地方都市“タベトゥ”つまり、テル・タバンのアッシリアの中央政権と具体的にどのような従属関係あったのかを究明し、アッシリア帝国の形成過程の解明に

貢献することが、本計画研究を着想した大きな理由である。

2. 研究の目的

(1) 本計画研究では、古代メソポタミア文明の中核をなすアッシリア文明の解明に焦点を置き、既存出土考古・文献資料の多角的分析や発掘調査を行い新たな知見を提供し、未だ不明瞭なアッシリアの政治、経済、宗教、社会構造の全容解明に貢献することを主眼とした。特に帝国化の黎明期に相当する前2千年紀のアッシリアと近隣諸国との従属関係や帝国化の発展過程とその要因を探り、アッシリア帝国の興亡の背景と人類が最初に築いた帝国主義の実体究明に焦点を置いた。前2千年紀のアッシリア時代の遺跡の調査件数は少なく、アッシリアの勢力範囲、支配体制、社会構造の実体は明らかになっておらず、欧米の研究者達はアッシリア史の中でも暗黒時代と呼んでおり、新たな文字史料と考古資料を渴望している。こうしたことから欧米学会では上述の国土舘大学が発掘調査したシリア、テル・タバンの遺跡出土の文字史料は、アッシリア史解明の一端を担っていると、我々の今後の調査動向に注目し研究成果が期待された。そこで本研究遂行の主眼を同遺跡の発掘調査に置き、新たな文字史料の発見を目指した。

(2) 本研究は、邦人初のメソポタミア地方における楔形文字使用期の歴史時代の考古学的調査である。邦人調査隊が発掘した楔形文字資料を邦人楔形文字研究者が解読するという、学会待望の考古学と文献学の共同した調査研究である。本研究が契機になり国内の考古学及び楔形文字研究者の活性化を促し、今後の西アジア古代史研究の発展に寄与することを目的とした。本研究は北メソポタミアの前2～1千年紀の歴史時代全般を包括する総合的研究調査であることを特筆しておきたい。

3. 研究の方法

(1) 本計画研究では、研究遂行の一環としてテル・タバンの発掘調査を実施する。テル・タバンの（約300x350m、高さ約25m）は、古バビロニア時代（前19-18世紀頃）のマリ文書や中期・新アッシリア時代（前13-11世紀頃・前9-7世紀頃）の首都アッシュールやニネヴェ出土の文書に登場する同流域の統轄拠点として繁栄した古代都市“タベトゥム/タベトゥ”に古くから比定されている遺跡でもある。タバンの1997年の調査で、古バビロニア時代から新アッシリア時代（前2～1千年紀）にかけての全アッシリア時代を網羅する連続した層序が確認されており、本研究を遂行するうえで最適の遺跡である。本研究期間内には出土文字史料・遺構・遺物を分

析し、暗黒時代とされている古～新アッシリア時代の編年の構築を目指している。特に、テル・タバンの1997-99, 2005年冬季調査で出土した中期アッシリア時代の楔形文字史料と本研究期間内の調査で出土する文字史料の解読と分析を行い、それらの成果をとおしてアッシリア史の解明に向けて国内外の研究者が渴望している新情報を提供する。

(2)上記のタバンの調査と並行し、領域研究の拠点遺跡シリア、ラッカのガーネム・アリ遺跡直近の墳墓群発掘調査を行う。前3千年紀後半の墓群の調査に焦点を置いており、出土遺構・遺物から同時代の北メソポタミアとユーフラテス川中流域の文化的関連を究明する。アッシリアの祖、古アッシリア王国を築いたシャムシ・アダト王はアムル人であったと考えられており、アムル人の出自・源流を究明するうえで同地域の前期青銅器時代(前24世紀頃)の遺跡調査は本研究には重要である。

4. 研究成果

(1)文書発見と解読成果

テル・タバンの調査からは、これまでの調査で総数約500点の楔形文字史料が出土している。本計画研究期間中の計5回の調査では計253点の古バビロニア時代(前18世紀)、中期・新アッシリア時代(前13~12.9~7世紀)の楔形文字史料(粘土板文書、煉瓦碑文、円筒形碑文)を採集した。

①中期アッシリア文書：同遺跡の2005年冬季調査で出土した総数約300点の中期アッシリア時代の粘土板文書の整理、解読を行った。その結果、これらの文書は前13~12世紀のマリ王国“タベトゥ”(テル・タバンの)王宮の行政文書であったことが判明した。王宮の文書保管庫出土の粘土板文書は、家畜、農作物、衣料品、土器、金属製品などの宮廷組織による管理についての実務的記録と書簡であり、そこには行政組織、行政範囲、外交領域、宗教文化、民族構成、地勢、経済基盤などを示唆する様々なデータ(物品名と数量、人名、官職名、地名、月名など)が含まれる。これらの文書の解読・研究の詳細は、未だ明らかでないが、タベトゥの内情を浮き彫りにするほか、中期アッシリア時代のシリア北東部地域におけるアッシリア帝国の広域支配の在り方を再考するために重要なデータを提供するはずである。また、歴史研究以外にも、書体、語彙、言語形態、書式等の文献学的詳細について新しい知見をもたらすものと期待される。

文書の解読も徐々に進み、学会待望の最新情報を迅速に内外に提供しており、アッシリア帝国の形成過程や中期アッシリアの全容解明に向けて大いに貢献している。

古バビロニア文書：ハブール川中・下流域の発掘調査で、古バビロニア時代の粘土

板文書が発見されたのはタバンの調査が最初で、欧米学会は文書の記述内容に注目した。書簡15点、語彙文書3点、行政文書(配給リストなど)3点、不動産下賜文書(文字入り封筒入り)1点等の計25点の粘土板文書が出土し、これらの解読により以下のことが解明された。

テルカの王からタバンの領主に差し出された複数の書簡や不動産下賜文書に“タベトゥム”という名が頻出していることからテル・タバンの調査は古バビロニア時代のマリ文書にも頻りに登場するハブール川中流域の統轄拠点“タベトゥム”であったことを実証した点は、本研究の調査で最大の成果である。

これまでの研究では前18後半~17世紀のハブール川流域が、一体どこの勢力下であったのか全く判然としなかったが、不動産下賜文書の記述からタバンの所在するハブール川中流域は、南のユーフラテス川流域のアムル人王国(ハナ国)の首都テルカの配下であったことが明らかになった。

(2)本計画研究期間中の計5回のテル・タバンの調査は、北メソポタミアの前2~1千年紀の解明に向けて、新資料を提供することができたという点で、画期的な調査成果をあげたといえる。本研究の特色とする歴史考古学的調査ならではの醍醐味は、楔形文字で記された史実を発掘調査によって実証することにつぎすが、文字史料の中には王名や正確な年代が記されたものが多数認められ、遺構、遺物の正確な年代を知ることが可能である。文書の解読が進み、新たな文字史料が出土すれば、タベトゥの歴代の王の足跡やアッシリア大王との諸関係の解明、さらに土器に対しては絶対年代の提示が可能になり、正確な土器編年の確立が期待できる。今後、資料を詳細に分析し公表することになれば、テル・タバンの調査は確実に当該期の考古学的研究を行う際の標準遺跡になるにちがいない。北メソポタミアの未だ不明瞭な前18~9世紀の歴史文化の解明に大きな貢献を果たすことが期待される。テル・タバンの文字史料の解読成果は、未だ不明瞭な北メソポタミアの前二千年紀の実体を解明するうえで、学会待望の第一級の新資料とされ国際的に注目されている。

(3)同遺跡での楔形文字資料の発見は、メソポタミア地方で日本の調査隊による50年におよぶ発掘史の中で、史上初のことである。日本調査隊が発掘した膨大な楔形文字資料を、日本人研究者が本格的に解読したのは今回が最初であることを特筆したい。西アジア考古学会待望の考古学と文献学の共同した調査研究が、欧米調査隊から遅れること100年が経ち、やっと始まったという点で、本調査は画期的であるといえる。これまでの日本の調査隊によるメソポタミア地方の発掘調査は、主に先史時代の遺跡に限られ、楔形文字使用期の歴史考古学の研究領域では欧米

諸国に後塵を拝していたが、本研究が契機になり日本がやっと欧米諸国と同じ土俵に立つことができたという点で、非常に意義深いと言える。

(4) 特定領域研究「セム系部族社会の形成」研究への具体的寄与

①テル・タバンの出土文字資料には部族社会に関連する貴重なデータが認められた。古バビロニア時代の不動産下賜文書で土地を割り当てられたタバトゥム（テル・タバンの）領主ヤスィム・マハルは、マリ文書に知られるスガークム職（地方都市代表者）を務めてテルカの王宮に対してタバトゥムの代表になったと考えられる。マリ王国の支配体制においてスガークムは個々の町、村落、部族集団から選出され、それぞれの地方社会を代表して王国の行政の一端を担った。不動産下賜文書は、スガークムが地方の側から部族社会の長として部族の権利を守りつつ、王国に対する責任を果たし、王国に銀で納税し、都市とその周辺の耕地の保全に責任を負ったことを示している。この地方支配制度は言うまでもなくセム系民族アムル人がつくりあげたシステムで本研究プロジェクト遂行に深く関与している。

テル・タバンの出土の古バビロニア時代の粘土板文書にはアムル語系の人名や神名、地名が頻出しており、今後さらに解読と考察が進めば、セム系民族の源流アムル人の勢力・移動範囲や拡散過程を知るうえで貴重な資料になるのは確実である。現に、不動産下賜文書に認められるテルカのイツィ・スムアビ王とその配下にいたタバンの領主ヤスィム・マハル王、その他の登場する人名は、全てアムル語であることが明らかになった。この新事実から、当時のハブール川中流域の居住民族はアラム人であったと推定される。楔形文字史料の発見と解読成果が、アッシリアと同じセム系民族アムル人の源流と特質を探究するうえで最も有効であることは言うまでもない。こうした面でも本計画研究班の研究成果は、「セム系部族社会の形成」の研究遂行に大きな貢献を成したといえる。

(5) ビシュリ調査での成果： テル・ガーンム・アル・アリ遺跡直近の墓群の調査を2008~2009年に計4回実施した。

2008年には前期青銅器時代（前24世紀頃）墓群の調査を5月と10月の2次にわたって実施した。計6基の盗掘された石室墓の発掘と墓群の踏査を行った。踏査では計33の墓群、総数151基の墓を確認した。その結果、1) 造営年代が前期青銅器時代後半とみて間違いないこと、2) 調査地の墓群が4つに類型化され、それぞれの類型が個別の景観立地を有していることがわかった。ビシュリ山系の定住農耕民の墓制や部族制を究明するうえで大きな成果をあげたと言える。

2009年度の2回の調査では、今後の調査展開に向けて大きな前進が認められた。特にテル・シャブート墳丘墓で発見された前期青銅器時代のケルン墓は、藤井計画研究班が調査しているビシュリ山地北麓に広がる中期青銅器時代のケルン墓群との関係性や、前期青銅器時代にはユーフラテス河畔の定住的集団とビシュリ山地の遊牧的集団には明確な区分があったのかを究明するうえで、興味深い成果を提供することができた。

ワディ・ダバ墓地での前期青銅器時代のシャフト墓の発掘成果は良質な埋葬証拠を提供しており、本研究プロジェクトが目指すユーフラテス川流域の青銅器社会と集団の動態的研究に新たな貢献ができるであろう。ユーフラテス川中流域の前期青銅器時代墓地研究が当時の「部族社会」を解明する潜在性を有している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計35件）

Numoto H. and Kume S. 2010

“Soundings of Hilltop Burial Mounds near Tell Ghanem Al-Ali”, “Cleaning and survey of Early Bronze Age shaft graves at Wadi Daba near Tell Ghanem Al-Ali”, *al-Rafidan*, Vol. XXXI, 132-136, 185-190

Numoto H. and Kume S. 2010

“Survey and sondage at the Cemeteries near the site of Tell Ghanem Al-Ali” *al-Rafidan*, Special issue, 49-60.

久米正吾・沼本宏俊 2010 「ユーフラテス川流域の古代墓を掘るーシリア、ビシュリ山系ガーンム・アル・アリ遺跡近郊墓域の第3次・4次調査（2009年）」第17回西アジア発掘調査報告会報告集：82-88

沼本宏俊 2010 「アッシリア帝国の拠点遺跡ーシリア・テル・タバンの遺跡の第9次発掘調査（2009年）」『考古学が語る古代オリエント』、第17回西アジア発掘調査報告会報告集：89-94。

久米正吾・沼本宏俊 2010 「テル・ガーンム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査(II)」『Newsletter セム系部族社会の形成』17：6-13。

Yamada S. 2010 “Administration and Society in the City of Tabatum as seen in the Old Babylonian Texts from Tell Taban” *al-Rafidan*, Special issue, 247-252.

Numoto H. 2009 “Excavations at Tell Taban, Hassake, Syria: Preliminary Report on the 2007 Season of Excavation” *Excavation at Tell Taban, Hassake, Syria: Preliminary Report on the 2007 Season of Excavations and the study of*

cuneiform Texts, 1-86.

Shibata D. and Yamada S. 2009 “Texts from the 2007 Excavations at Tell Taban: A Preliminary Report” *Excavations at Tell Taban, Hassake, Syria: Preliminary Report on the 2007 Season of Excavations and the study of cuneiform Texts*, 87-109.

Numoto H. and Kume S. 2009 “Cleaning and Survey of the Early Bronze Age Hilltop Tombs in the Wadi Shabbout Area near Tell Ghanem Al-Ali”, “Archaeological survey of the Early Bronze Age off-site Tombs in the Wadi Shabbout Area near Tell Ghanem Al-Ali”, *al-Rafidan*, Vol. XXX, 172-180, 193-198.

久米正吾・沼本宏俊 2009 「ユーフラテス川流域の古代墓を掘るーシリア、ビシュリ山系ワディ・シャブート墓域の第1次・2次調査(2008年)」『考古学が語る古代オリエント』、第16回西アジア発掘調査報告会報告集：80-85。

Shibata D. 2009 “An Old Babylonian Manuscript of the Weidner God-List from Tell Taban/Tabatum in the Middle Habur Region” *Iraq*, 71, 33-34.

(査読有)

柴田大輔 2009 「タベトゥ市とマリの地の王ー2005年テル・タバンの出土中期アッシリア文書ー」オリエント51-1：69-85 (査読有)

久米正吾・沼本宏俊 2009 「テル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査」『Newsletter セム系部族社会の形成』14：11-19。

Numoto H. 2008 “Excavations at Tell Taban, Hassake, Syria (6), Preliminary Report of the 2006 Season of Work”, *al-Rafidan*, Vol. XXVIII, 1-46.

Yamada S. 2008 “A Preliminary Report on the Old Babylonian Texts from the Excavation of Tell Taban in the 2005 and 2006 Seasons: The Middle Euphrates and Habur Areas in Post-Hammurabi Period”, *al-Rafidan*, Vol. XXVIII, 47-62.

沼本宏俊 2008 「アッシリア帝国の拠点遺跡ーシリア、テル・タバンの遺跡の第7次発掘調査(2007年)ー」『考古学が語る古代オリエント』、第15回西アジア発掘調査報告会報告集：79-85。

山田重郎・柴田大輔 2008 「2007年シリア、テル・タバンの遺跡出土楔形文字文書」『考古学が語る古代オリエント』、第15回西アジア発掘調査報告会報告集：86-89。

Numoto H. 2007 “Excavations at Tell Taban, Hassake, Syria (5), Preliminary Report of the 2005 Summer Season of Work”, *al-Rafidan*, Vol. XXVIII, 1-63.

Shibata D. 2007 “Middle Assyrian Administrative and Legal Texts from the 2005 Excavation at the Tell Taban: A

Preliminary Report” *al-Rafidan*, Vol. XXVIII, 64-74.

山田重郎、柴田大輔 2007 「2005/2006年シリア、テル・タバンの出土楔形文字文書」『考古学が語る古代オリエント』、第14回西アジア発掘調査報告会報告集：128-131。

[学会発表] (計41件)

久米正吾 「ユーフラテス川流域の古代墓を掘るーシリア、ビシュリ山系ガーネム・アル・アリ遺跡近郊墓域の第3次・4次調査(2009年)」日本西アジア考古学会主催第17回西アジア発掘調査報告会。2010年3月28日。於サンシャイン文化会館。

沼本宏俊 「アッシリア帝国の拠点遺跡ーシリア・テル・タバンの遺跡の第9次発掘調査(2009年)」日本西アジア考古学会主催第17回西アジア発掘調査報告会。2010年3月28日。於サンシャイン文化会館。

柴田大輔 Middle Assyrian dedicatory brick inscription to Adad-Ma ani: New evidence for the royal line and religion of Tabetu, 2nd SAKURA meeting, 2010年3月17日。Fondation Hugot, Paris.

沼本宏俊 「アッシリア帝国の拠点遺跡、シリア・テル・タバンの発掘調査」岡山市立オリエント美術館特別講演会。2010年2月20日。岡山市立オリエント美術館。

沼本宏俊 「北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究の成果概要」特定領域研究「セム系部族社会の形成」第6回シンポジウム。2010年2月4,5日。池袋あうるすぽっと。

沼本宏俊 “General Report of Excavations at Tell Taban” 1st SAKURA meeting, 2009年11月25日。筑波大学。

山田重郎 “Amorite Societies along the Lower Habur according to the Tell Taban Tablets” Formation of Tribal Communities, 2009年11月23日。池袋サンシャインシティ文化会館。

久米正吾 “Surveys and Sondage at the Grave Complexes near the Site of Tell Ghanem al-‘Ali” Formation of Tribal Communities, 2009年11月23日。池袋サンシャインシティ文化会館。

沼本宏俊 「アッシリア帝国の拠点遺跡ーシリア・テル・タバンの遺跡の第8次発掘調査(2008年)」日本西アジア考古学会主催第16回西アジア発掘調査報告会。2009年3月14日。於サンシャイン文化会館。

沼本宏俊 「くさび形文字文書の発掘ーシリア・テル・タバンの遺跡の発掘調査」栃木県オリエント協会第35回栃木県オリエントセミナー。2008年6月7日。於栃木県立博物館。

沼本宏俊・山田重郎「テル・タバンの出土文書史料からみた部族」特定領域研究「セム系部族の形成」第4回シンポジウム。2008年2月16日。於池袋ワールドインポートマート。

沼本宏俊「粘土板文書の発掘—シリア、テル・タバンの調査—」、日本オリエント学会第281回定例講演会。2007年5月26日。於東京天理教館。

〔図書〕(計 7 件)

久米正吾・沼本宏俊 2010「テル・ガーンム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査」『紀元前3千年紀の西アジア—ユーフラテス川中流域に部族社会の原点を探る』六一書房刊、45-55。

山田重郎 2010「前2千年紀におけるアムル人、アラム人とアッシリア」『紀元前3千年紀の西アジア—ユーフラテス川中流域に部族社会の原点を探る』六一書房刊、129-138。

柴田大輔 2009「前二千年紀後半アッシリア統治下における地方拠点都市：景観、行政、祭祀」『農耕と都市の発生—西アジア考古学最前線』同成社刊、213-226。

Numoto H. (ed.)2009 Excavations at Tell Taban, Hassake, Syria: Preliminary Report on the 2007 Season of Excavations and the study of cuneiform Texts, 1-109.

山田重郎 2009「タバトゥム市とその周辺—ポスト・ハンムラビ時代のハブル川下流域とユーフラテス川中流域における政治的・社会的・文化的諸相」『セム系部族社会の形成研究集会報告集—シリア・メソポタミア世界の文化接触：民俗・文化・言語—』86-95。

Numoto H. (ed.)2008 Excavations at Tell Taban, Hassake, Syria: Preliminary Report on the 2005 and 2006 seasons of excavations and the study of the Old Babylonian and middle Assyrian Texts, 1-180.

〔その他〕報道関連情報

朝日新聞：平成18年1月4日 夕刊文化面「くさび形文字進む解読」

朝日新聞：平成18年1月27日 朝刊文化面「約4千年前の封筒、シリアで見つかる」

テレビ：NHK ニュース、平成17年1月29日午後6時、7時（ニュース7）「くさび形文字を初めて解読」

ホームページ：asahi.com（朝日新聞社）平成18年1月27日 「約4千年前の粘土の封筒、シリアで見つかる 粘土板の文書も」

6. 研究組織

(1) 研究代表者

沼本 宏俊 (NUMOTO HIROTOSHI)
国士舘大学・体育学部・教授
研究者番号：40198560

(2) 研究分担者

柴田 英明 (SHIBATA HIDEAKI)
国士舘大学・理工学部・教授
研究者番号：50103635
(H20 H21 連携研究者)

山田 重郎 (YAMADA SHIGEO)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授
研究者番号：30323223
(H20 H21 連携研究者)

真保 昌弘 (SHINBO MASAHIRO)
国士舘大学・イラク古代文化研究所・共同研究員
研究者番号：60407202
(H20 H21 連携研究者)

北野 信彦 (KITANA NOBUHIKO)
東京文化財研究所・伝統技術保存修復室・室長
研究者番号：90167370
(H20 H21 連携研究者)

小泉 龍人 (KOIZUMI TATSUNDO)
国士舘大学・イラク古代文化研究所・共同研究員
研究者番号：80257237
(H17 H19 研究分担者)

(3) 連携研究者

西山伸一 (NISHIYAMA SHINICHI)
サイバー大学・世界遺産学部・准教授
研究者番号：50392551
(H18 H20 研究協力者、H21 連携研究者)

柴田 大輔 (SHIBATA DAISUKE)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・助教
研究者番号：40553293
(H18 H20 研究協力者、H21 連携研究者)

久米 正吾 (KUME SHOGO)
国士舘大学・イラク古代文化研究所・共同研究員
研究者番号：30550777
(H18 H20 研究協力者、H21 連携研究者)

(4) 研究協力者

小野 勇 (ONO ISAMU)
国士舘大学・理工学部・技術職員